

分野別・日本語習得レビュー論文総覧（～2006）

佐々木 嘉則

詳細目次

0. 本稿の目的
1. 全分野の概観：
 - 1.1. 文献総覧
 - 1.2. 総説
2. 習得理論・原理
 - 2.1. 生成文法（普遍文法理論）
 - 2.2. 認知心理学
 - 2.3. 処理可能性モデル
 - 2.4. 社会学習論的アプローチ
 - 2.5. 二重メカニズムモデルと使用依拠理論
 - 2.6. プロトタイプ理論
 - 2.7. 競合モデル
3. 文法習得（主に統語・意味論）
 - 3.1. 時制（テンス）／相（アスペクト）
 - 3.2. 法（モダリティ）：
 - 3.3. 態（ボイス）
 - 3.3.1. 授受構文
 - 3.4. 複文構造
 - 3.4.1. 名詞修飾
 - 3.4.1.1. 統語・意味論
 - 3.4.1.2. 形態論
 - 3.4.2. 引用
4. 品詞
 - 4.1. 指示詞
 - 4.2. 再帰代名詞
 - 4.3. 助詞
5. 文字／語彙習得
 - 5.1. 概観
 - 5.2. 付随的語彙学習
 - 5.3. 意味推測
 - 5.4. 漢語
 - 5.5. 複合動詞
 - 5.6. 研究方法
6. 音声習得

- 6.1. 概観
- 6.2. 評価
- 6.3. 特殊拍
- 6.4. 長音
- 6.5. ポーズ
7. 語用論の習得
 - 7.1. ポライトネス
 - 7.2. 談話
8. 習得環境
 - 8.1. インプットとインターアクション
 - 8.2. インプット、フィードバックと教育
 - 8.3. Focus on form
 - 8.4. 明示的文法教示の効果
9. 個人差要因
 - 9.1. 情意的要因
 - 9.1.1. 概観
 - 9.1.2. 動機づけ
 - 9.2. 学習スタイル
10. 言語変種・ジャンル・レジスター
 - 10.1. ラ抜き言葉
 - 10.2. フォリナートーク
 - 10.3. ビジネス日本語
11. 個別技能
 - 11.1. 読む
 - 11.1.1. 概観
 - 11.1.2. 高次処理
 - 11.1.3. 低次処理
 - 11.2. 聞く
 - 11.2.1. スキーマ理論
 - 11.2.2. 聴解ストラテジー
 - 11.3. 書く
 - 11.3.1. 概観
 - 11.3.2. ピアレスポンス
 - 11.3.3. アカデミック・ライティング教育
 - 11.3.4. 評価基準
 - 11.4. 話す
 - 11.4.1. 文産出
 - 11.4.2. 会話
 - 11.4.2.1. 会話分析と SLA
 - 11.4.2.2. コードスイッチング

- 11. 4. 2. 3. ターンテイキング
- 11. 4. 2. 4. 話題転換
- 11. 4. 2. 5. あいづち
- 11. 4. 2. 6. 電話会話
- 12. 国語学理論
 - 12. 1. 文章論
- 13. 年少者のバイリンガリズム
- 14. 教育課程
 - 14. 1. 非母語話者児童を対象とする教育
 - 14. 1. 1. 多言語併用教育
 - 14. 1. 2. 第二言語話者児童教育における母語使用
 - 14. 2. 母語話者を対象に含めた教育
 - 14. 2. 1. スピーチコミュニケーション (国語教育)
- 15. テクノロジー利用
- 16. 異文化適応
- 17. 地域事情・日本語教育史
 - 17. 1. 海外の日本語教育
 - 17. 1. 1. 豪州 (1970 年代～現代)
 - 17. 1. 2. 韓国 (19 世紀末～現代)

分野別・日本語習得レビュー論文総覧 (～2006)

佐々木 嘉則

0. 本稿の目的

本プロジェクトを通じて、日本語の習得・教育に関する47本のレビュー論文が既に『第二言語教育・習得の研究最前線』に掲載・発表されている(本号掲載分を含む)。これらに加え、『第二言語としての日本語の習得研究』『日本語教育』などの専門誌や各種専門書籍にも少なからぬ数のレビューが掲載されている。これらの既発表のレビュー(主として、2000年以降に発表されたもの)をテーマごとに分類整理することを試みたのがこの資料である。これから研究論文あるいはレビューの執筆に挑もうと意気込んでいる読者は、手始めに以下の当該分野の先行業績を確認しておけば、その後の作業が効率的に進められると思う。

もちろん本稿筆者が全ての研究分野に精通しているわけではないので、見落としもあるかと思う。本稿を一つの踏み台として、各分野の専門家が正確かつわかりやすい見取り図を提示してくださることを切望する。

1. 全分野の概観：

1.1 文献総覧

Kess, J. F., Miyamoto, T. (1994) *Japanese Psycholinguistics (Library and Information Sources in Linguistics)*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

国立国語研究所 (2000-2006) 『日本語教育年鑑』くろしお出版

1.2 総説

小柳かおる (1997) 「米国における第二言語習得研究動向：日本語教育へ示唆するもの」『日本語教育』97, 37-53.

長友和彦 (1993) 「日本語の中間言語研究—概観—」『日本語教育』81, 1-18.

長友和彦 (1998) 「第二言語としての日本語の習得研究」日本児童研究所(編)『児童心理学の進歩 1998年版』金子書房 79-110.

長友和彦 (1999) 「第二言語としての日本語の習得研究：概観、展望、本科学研究の位置づけ」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成8～10年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者カッケンブッシュ寛子：9-41。(長友(1998)をほぼそのまま転載)

吉岡薫 (1999) 「第2言語としての日本語習得研究：現状と課題」『日本語教育』100, 19-32.

坂本正 (2004) 「日本語教育と第二言語習得研究の接点を求めて」小山悟・大友可能子・野原美和子(編)『言語と教育』くろしお出版 329-350.

2. 習得理論・原理

2.1 生成文法(普遍文法理論)

Kanno, K. (2006) Accessibility of Universal grammar in second language acquisition, In M. Nakayama, R. Madzuka & Y. Shirai(Eds.), *The Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*, Cambridge: Cambridge

University Press, 144-150.

2.2 認知心理学

小柳かおる (2005) 【講演録】「言語処理の認知メカニズムと第二言語習得：記憶のシステムから見た手続き的知識の習得過程」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』(『言語文化と日本語教育』2005 年 11 月増刊特集号) 11-36.

小柳かおる (2001) 「第二言語習得過程における認知の役割」『日本語教育』109, 10-19.

2.3 処理可能性モデル

峯布由紀 (2002) 「Processability theory に基づいた言語習得研究」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 28-44.

Kawaguchi, S. (2005) Processability theory and Japanese as a second language, *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 8, 83-114.

2.4 社会学習論的アプローチ

柳町智治 (2003) 「社会言語学的 AJSL 研究における新しいアプローチ：目標言語の使用とインタラクションの文脈への注目」畑佐由紀子(編)『第二言語習得研究への招待』くろしお出版 19-30.

2.5 二重メカニズムモデルと使用依拠理論

菅谷奈津恵 (2004) 「第二言語の生産的言語能力獲得におけるかたまりの役割：日本語の動詞活用を中心に」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』(『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月増刊特集号) 110-123.

2.6 プロトタイプ理論

菅谷奈津恵 (2004) 「プロトタイプ理論と第二言語としての日本語の習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』7, 121-140.

2.7 競合モデル

佐々木嘉則 (2003) 「競合モデルに基づく第二言語習得研究の論点：日本語習得の視点から」畑佐由紀子(編)『第二言語習得研究への招待』くろしお出版 31-46.

Sasaki, Y. & MacWhinney, B. (2006) Contentions of Language Acquisition Research based on the Competition Model, In Nakayama, M., Madzuka, R., & Y. Shirai(Eds.), *The Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press, 307-314.

3. 文法習得 (主に統語・意味論)

3.1 時制 (テンス)／相 (アスペクト)

Shirai, Y. (2002) The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese, *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 5, 42-61.

菅谷奈津恵 (2002) 「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観：「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 70-86.

菅谷奈津恵 (2005) 「日本語のアスペクト習得に関する研究の動向」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』(『言語文化と日本語教育』2005 年 11 月増刊特集号) 39-67.

3.2 法 (モダリティー) :

黒滝真理子 (2002) 「日英対照・認知的モダリティーの研究動向」 お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 87-101.

3.3 態 (ボイス)

3.3.1 授受構文

尹喜貞 (2004) 「第二言語としての日本語の授受動詞習得研究概観：習得順序の結果と研究方法との対応に焦点をあてて」 お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』(『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月増刊特集号) 168-181.

3.4 複文構造

3.4.1 名詞修飾

3.4.1.1 統語・意味論

齋藤(大関)浩美 (2002) 「連体修飾節の習得に関する研究の動向」 お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 45-69.

大関浩美 (2003) 「なにが関係節習得の難易を決めるのか：研究の動向および日本語習得研究への示唆」 お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号) 32-50.

3.4.1.2 形態論

高橋織恵 (2004) 「連体修飾構造の習得過程に関する研究概観：「の」の過剰使用と脱落を中心に」 お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』(『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月増刊特集号) 147-167.

3.4.2 引用

杉浦まそみ子 (2002) 「日本語の引用表現研究の概観—習得研究にむけて」 お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 120-135.

4. 品詞

4.1 指示詞

森塚千絵 (2003) 「日本語の指示詞コソアとその習得研究の概観」 お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号) 51-76.

単娜 (2005) 「日本語の指示詞に関する研究概観：対照研究を中心に」 お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』(『言語文化と日本語教育』2005 年 11 月増刊特集号) 69-100.

4.2 再帰代名詞

Thomas, M. (2006) Japanese, the grammar of reflexives, and second language acquisition. In M. Nakayama, R. Madzuka, & Y. Shirai (Eds.), *The Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press, 151-157.

4.3 助詞

遠山千佳 (2005)「助詞「は」に関する第二言語習得研究の流れと展望：探索的研究と演繹的研究の枠組みから」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』(『言語文化と日本語教育』2005 年 11 月増刊特集号) 101-121.

5. 文字／語彙習得

5.1 概観

谷内美智子 (2002)「第二言語としての語彙習得研究の概観：学習形態・方略の観点から」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 155-169.

森美子 (2003)「日本語における語彙習得」畑佐由紀子(編)『第二言語習得研究への招待』くろしお出版 47-66.

5.2 付随的語彙学習

谷内美智子 (2003)「付随的語彙学習に関する研究の概観」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号) 78-95.

吉澤真由美 (2004)「L2 読解における incidental vocabulary learning：教育的支援に関する研究の概観と今後の課題」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』(『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月増刊特集号) 88-108.

5.3 意味推測

徳田 恵 (2006)「読解における未知語の意味推測と語彙学習」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2006 年版』(『言語文化と日本語教育』2006 年 11 月増刊特集号) 【本号】

5.4 漢語

陳毓敏 (2003)「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得研究の概観：意味と用法を中心に」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号) 96-113.

5.5 複合動詞

松田文字 (2002)「複合動詞研究の概観とその展望：日本語教育の視点からの考察」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 170-184.

5.6 研究方法

山内博之 (2004)「語彙習得研究の方法：茶筌と N グラム統計」『第二言語としての日本語の習得研究』7, 141-162.

6. 音声習得

6.1 概観

戸田貴子 (2001)「日本語音声習得研究の展望」『第二言語としての日本語の習得研究』4, 150-169.

6.2 評価

小池圭美 (2003)「音声に関する評価研究の概観と今後の展望」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号)

116-127.

松崎寛 (2004) 「発音評価研究の展望」小林ミナ(研究代表者)『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するのか』平成 12~15 年度科学研究費補助金 基盤研究 研究成果報告書(課題番号 12480058) 37-51.

6.3 特殊拍

戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7(2), 70-83.

6.4 長音

小熊利江 (2002) 「日本語の長音と短音に関する中間言語研究の概観」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 189-200.

6.5 ポーズ

石崎晶子 (2003) 「ポーズに関する研究の概観：学習者の発話におけるポーズ研究の基盤構築に向けて」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号) 128-146.

7. 語用論の習得

7.1 ポライトネス

深田淳 (2002) 「ポライトネスの習得研究—その現状と展望」『第二言語としての日本語の習得研究』5, 97-107.

7.2 談話

八木公子 (1998) 「中間言語における主題の普遍的卓越：「は」「が」の習得研究からの考察」『第二言語としての日本語の習得研究』2, 57-67.

遠山千佳 (2006) 「第二言語における談話の習得：認知語用論的アプローチからの一考察」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2006 年版』(『言語文化と日本語教育』2006 年 11 月増刊特集号) 【本号】

8. 習得環境

8.1 インプットとインターアクション

ウェイ諸石万里子 (2003) 「第二言語としての日本語習得におけるインプットと相互交流の役割」畑佐由紀子(編)『第二言語習得研究への招待』くろしお出版 1-17.

8.2 インプット、フィードバックと教育

横山紀子 (1998) 「言語教育におけるインプットとアウトプットの果たす役割」『日本語国際センター紀要』8, 67-79.

横山紀子 (1999) 「インプットの効果を高める教室活動」『日本語国際センター紀要』9, 37-80.

岩下倫子 (2004) 「第二言語習得における会話練習の役割：否定フィードバックの先行研究の概要と今後の研究課題」『第二言語としての日本語の習得研究』7, 163-185.

8.3 Focus on form

小池圭美 (2002) 「Focus on Form と言語形式：海外における研究の概観と日本語習得研究への提言」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 136-149.

小柳かおる (2002) 「Focus on Form と日本語習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』5, 62-96.

8.4 明示的文法教示の効果

向山陽子 (2004) 「文法指導の効果に関する実験研究概観：明示性の観点から」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』(『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月増刊特集号) 124-146.

畑佐由紀子 (2006) 「フォーム・フォーカスト・インストラクション研究の現状と動向」『第二言語としての日本語の習得研究』9, 63-90.

9. 個人差要因

9.1 情意的要因

9.1.1 概観

サミー小宮桂子 (2003) 「学習者の個人差：学習者の情動的要因と日本語教育」畑佐由紀子(編)『第二言語習得研究への招待』くろしお出版 101-112.

9.1.2 動機づけ

守谷智美 (2002) 「第二言語教育における動機づけの研究動向：第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 315-329.

9.2 学習スタイル

真嶋潤子 (2005) 「学習者の個人差と第二言語習得：「学習スタイル」を中心に」『第二言語としての日本語の習得研究』8, 115-134.

10. 言語変種・ジャンル・レジスター

10.1 ラ抜き言葉

辛昭静 (2002) 「ら抜き言葉の研究概観」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 102-119.

10.2 フォリナー・トーク

徳永あかね (2003) 「日本語のフォリナー・トーク研究：その来歴と課題」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号) 162-175.

10.3 ビジネス日本語

李志暎 (2002) 「ビジネス日本語教育を考える」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 245-260.

近藤彩 (2004) 「日本語教育のためのビジネス・コミュニケーション研究」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』(『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月増刊特集号) 202-222.

11. 個別技能

11.1 読む

11.1.1 概観

近松暢子 (2003) 「外国語としての日本語の読み・読解研究」畑佐由紀子(編)『第二言語習得研究への招待』

くろしお出版 67-85.

11.1.2 高次処理

堀場裕紀江 (2002) 「第 2 言語としての日本語リーディング研究の展望」『第二言語としての日本語の習得研究』5, 108-132.

Horiba, Y. (2006) Reading in Japanese as a second language, In M. Nakayama, R. Madzuka & Y. Shirai(Eds.), *The Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press, 173-178.

石井怜子 (2005) 「結束性構築の視点から見た第二言語読解研究概観：スキーマ理論を超えて」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』(『言語文化と日本語教育』2005 年 11 月増刊特集号) 125-158.

11.1.3 低次処理

Koda, K. (2006) Development of lexical competence among second-language readers. In M. Nakayama, R. Madzuka, & Y. Shirai(Eds.), *The Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press, 165-172.

11.2 聞く

11.2.1 スキーマ理論

尹松 (2002) 「第二言語・外国語教育における聴解指導法研究の動向」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 279-288.

11.2.2 聴解ストラテジー

横山紀子 (2004) 「第 2 言語における聴解ストラテジー研究：概観と今後の展望」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』(『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月増刊特集号) 184-201.

11.3 書く

11.3.1 概観

畑佐由紀子 (2003) 「第二言語における作文研究の現状」畑佐由紀子(編)『第二言語習得研究への招待』くろしお出版 87-100.

11.3.2 ピアレスポンス

池田玲子 (2002) 「第二言語教育でのピア・レスポンス研究：ESL から日本語教育に向けて」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 289-310.

11.3.3 アカデミック・ライティング教育

大島弥生 (2003) 「日本語アカデミック・ライティング教育の可能性：日本語非母語・母語話者双方に資するものを目指して」お茶の水女子大学日本語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号) 198-224.

11.3.4 評価基準

田中真理・長阪朱美 (2004) 「日本語と英語を目標言語とするライティング評価基準の展望：第二言語としての日本語のライティング評価基準作成に向けて」『第二言語としての日本語の習得研究』7, 214-253.

11.4 話す

11.4.1 文産出

Iwasaki, N. (2006) Speaking Japanese as a second language: L2 Japanese sentence production, In M. Nakayama, R.

Madzuka & Y. Shirai(Eds.), *The Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press, 158-164.

11.4.2 会話

11.4.2.1 会話分析と SLA

森純子 (2004) 「第二言語習得研究における会話分析: Conversation Analysis(CA)の基本原則、可能性、限界の考察」『第二言語としての日本語の習得研究』7, 186-213.

11.4.2.2 コードスイッチング

Nishimura, M. (2006) Intrasentential code-switching in Japanese and English, In M. Nakayama, R. Madzuka & Y. Shirai(Eds.), *The Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press, 179-187.

田崎敬子 (2006) 「コードスイッチング研究の概観: 多言語社会のコミュニケーション分析に向けて」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2006 年版』(『言語文化と日本語教育』2006 年 11 月増刊特集号)【本号】

11.4.2.3 ターンテイキング

金志宣 (2002) 「Turn-taking 研究の動向: "turn"と"turn-taking"をめぐる議論を中心に」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号)205-221.

11.4.2.4 話題転換

楊虹 (2005) 「話題転換研究の概観: タイプと方略を中心に」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』(『言語文化と日本語教育』2005 年 11 月増刊特集号)159-185.

11.4.2.5 あいづち

陳姿菁 (2002) 「日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号)222-235.

柳川子 (2003) 「日本語学習者を対象とした相づち研究の概観」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号)148-161.

11.4.2.6 電話会話

林美善 (2002) 「電話会話における終結部研究の動向: 日米・日韓を比較した研究を中心に」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号)236-244.

12. 国語学理論

12.1 文章論

李貞旼 (2002) 「文章論研究の概観」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号)266-278.

13. 年少者のバイリンガリズム

中島和子 (2005) 「バイリンガル育成と 2 言語相互依存性」『第二言語としての日本語の習得研究』8, 135-166.

久津木文 (2006) 「バイリンガルの言語発達について」『心理学評論』49(1), 158-174.

大嶋百合子 (2006) 「バイリンガル言語獲得研究は何を教えてくれるか? : 久津木論文へのコメント」『心理学評論』49(1), 175-179.

14. 教育課程

14.1 非母語話者児童を対象とする教育

14.1.1 多言語併用教育

原みずほ (2002) 「多言語併用教室の言語使用に関する研究 : 日本における加算的バイリンガリズムの実現を目指して」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 354-367.

14.1.2 第二言語話者児童教育における母語使用

朱桂栄 (2004) 「日本語以外の言語を母語とする言語少数派の子どもへの学習支援における二言語併用の役割 : 二言語併用研究の示唆するもの」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』(『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月増刊特集号) 223-249.

14.2 母語話者を対象に含めた教育

14.2.1 スピーチコミュニケーション (国語教育)

村松賢一 (2002) 【依頼論文】「国語科におけるコミュニケーション能力の育成 : 音声言語教育の現状と課題」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 368-380.

15. テクノロジー利用

畑佐一味 (2003) 「日本語 CALL の現状と今後」畑佐由紀子(編)『第二言語習得研究への招待』くろしお出版 113-129.

16. 異文化適応

田中共子 (1998) 「在日留学生の異文化適応 : ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から」『教育心理学年報』37, 143-152.

17. 地域事情・日本語教育史

17.1 海外の日本語教育

17.1.1 豪州 (1970 年代~現代)

鈴木京子 (2002) 「多文化教育としての LOTE 教育の構築に向けて : オーストラリアの日本語教育における近年の動向に関する一考察」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 337-353.

17.1.2 韓国 (19 世紀末~現代)

河先俊子 (2003) 「韓国における日本語教育史研究の概観」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』(『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号) 178-197.